

グッドラック、ミリアンラッキー

いも

大学爆発まで、あと五秒。

青い線と赤い線、どつちを切る？

名は体を表す、とはよく言ったものだ。

入学式後のガイダンスに設けられた、自分の名前に入っている漢字について調べて、周りの人と感想を言い合おう、というレクリエーション。大学というのは小・中・高とは違って、各地から学生が集まる。高校時代の同級生が一人もいない大学に進学した人も多いただろうということで、こういう場を通じて新しい友達を作ろうという粋な計らい。なんだろうけど、俺にとつては、余計なお世話だった。自分の名前に感想もクソもない。たとえ親しい人にも、名前のことには触れないでほしい。同じ講義棟に集められて数時間の仲の他人なら、なおさら。

大学生協で買った新品のノートパソコンで、しぶしぶ俺の名前に入った漢字が使われている四字熟語を調べる。弱肉強食、奢侈文弱、薄志弱行……ほーら、悪い意味ばかり。

ため息をついた途端、ブツツと画面が真っ暗になって、そこに今朝スツ転んで右頬を擦りむいた、間抜け面の俺が映った。「あ？ あああ……！」

講義棟はざわざわしていたのに、俺の競馬に負けたおっさん

みたいな声は悪目立ちした。俺は慌てて口をふさぐ。皆が静まり返る中でただ一人、「どうしたの？」と声を出したのは、偶然俺の隣に座っていた男だった。子どもっぽいけど、優しい顔立ち。

「買ったばっかのパソコン、壊れた……」

優しい男は、「え、うそお」と俺のパソコンの電源をポチポチ押したり、長押ししてみたりする。うんともすんとも言わない。

「あれ……ほんとだ」

あーあ、やつぱり。

俺は、パソコンの電源をつけようと約五分にわたって格闘してくれた優しい男に「迷惑かけてごめん」とお礼を言つて、潔くそつとパソコンを閉じた。ら、画面のこととキーボードのことを繋いでる部分が、外れた。

「パソコンの首が！」

泣き別れに！ あんなにそつと閉じたのに……と、俺に悪いと思つてかほとんど口パクで呟く優しい男。大丈夫だからとか、気にしないでいいからとか、この優しい男がもう俺に手を煩わされないようになんか言つてやらなければならなかったと思うけど、俺はもう「あーあ、あー……」と情けない声しか出せなかった。

もう他の学生達は、自分の名前に入っている漢字について調べ終わっているどころか、周りの人と感想を言い合う段階も終わりそうだ。話し声がまばらになって、閑散としてきている。「はい。どう、ですか、ね……そろそろ、皆さん話し

合えたかな？」と白髪交じりの教授がマイクを使つて呼びかける。さっき出てきた四字熟語をぐるぐる反芻していた俺の脳は、その声でいくぶんか正気を取り戻した。隣を見ると、優しい男は自分のパソコンで俺のパソコンの型番を調べていた。まだ希望を捨てず、俺を見捨てないでくれていた。「ありがとう、もう大丈夫」と今度こそ発した声は、教授の声にパツと顔を上げた優しい男によつてかき消された。

「すみません！ ちょっとパソコンに不具合が」

ああ、本当に優しいな、この男は。ピシッと手を挙げた優しい男に気づいた教授が、「あらら」と段差に躓きながら、講義棟の真ん中くらいの位置に座っている俺達に近づいてくる。しばらくことが進まないらしいと察した学生達は雑談に入り、ピロン、ピロンとスマホで連絡先を交換する音が聞こえ始める。レクリエーションの効果は目的通り、遺憾なく発揮されそうだ。一方俺は、

「おれ、ゆら。結ぶに、良いつて書いて結良だよ。君とも良い縁ありそうだよね」

よろしく、と握手を求めてくれた優しい男、結良の手を、

「俺は弱肉強食の……」

「強くん？」

「ううん、弱いつていう字で、よわし。小・中・高のあだ名はMr. アンラッキー」

握った。ら、季節外れの静電気が起こった。

「あ痛っ」

結良は、余韻で痺れる手をぽかんと見つめる。

「俺と仲良くしてくれても、あんまり良いことないかもよ」

物心ついた頃から、いや、生まれたときから、俺は運が悪い。母の腹の中で、へその緒が首に巻きついていて俺は難産になつて、そのせいで母は死んだ。何も無いところでスツ転ぶ、買ったばつかのものが壊れる、大事なところで静電気に襲われる……誤解を受けて、友達を失くす。ちよつとしたアンラッキーから大惨事なアンラッキーまで、全て取り揃えております俺の人生は、たぶんこの先もろくでもない。これほど不運な奴、存在自体運が悪い。隣にいるだけで迷惑を被る。誤解されなかつたつて、人は自然と俺に寄りつかなくなるわけだ。

だからこの優しい男も、きつと。

しかし俺の憂いをよそに、隣の静止画は、さっきの静電気と同じくはじけたように笑いだした。今度は俺がぽかんとする番だった。

「あららら、うんともすんとも言いませんね。こりゃ最悪、買い直しだな」

顎に手を当て、俺のパソコンを芸術品みたく眺めながらそう呟く教授は、声色とは正反対になぜか微笑んでいた。

それから一年が経とうとする今も、結良はこうして俺と一緒に学食で飯を食ってくれる。

やつとのことで、三人で座れる席を見つけた俺達は、急いでそのテーブルまで移動した。

「さて、食べよ食べよ。……あれ？ 弱くん、かつ丼にするって
言ってなかった？」

俺と向き合う形で席についた結良は、俺のトレーに乗ったから揚げ定食を指さした。

「俺の前に並んでた人の分で完売だよ」と

いつものことだ。結良は驚かず、「また明日チャレンジだね」と頷いて、自分の野菜炒め定食をつつく。

「亮は？」

「そっぴいば、まだ来ないね。講義が長引いてるのかな」

亮。結良の、中学校からの同級生で、学部は違うけどよく一緒に飯を食ったり、遊びに出掛けたりする。中学生の頃から結良とは仲が良くて、明るくて素直な良い奴だ。亮という漢字には、明るい、まことという意味がある。名は体を表す、とはよく言ったものだ。

これは結良にも当てはまる。結良の周りには亮を筆頭に、良い奴がたくさんいる。結良は本当に、良い縁を呼ぶ星のもとに生まれてきたんだと思う。

俺の視線に気づかず、夢中で野菜炒めを頬張る結良は幸せそうで、俺みたいに、次の一口がちゃんと解凍されていなくて冷たいなんてこと、きつと微塵も心配していない。から揚げと並んで皿に乗っていたブロッコリーは、案の定凍っていて、箸で掴むとコツリと音がした。

ブロッコリーを飴玉みたく味いながら、学食の入口からカウンスターまでの列を眺める。

「まだ来でないな、亮」

結良もそろそろ不安になってきたようで、スマホを片手に首を傾げている。

「学食で待つてる」って連絡入れてあるんだけど、既読がつかないんだ」

おどけてみえてその実真面目な亮は普段、だいたいの連絡を五分以内に返す。講義にしても長引きすぎだ。どうしたんだろう……。

「あ、まてよ。結良、そのままその画面見えて」

立ち上がって、じりじりと結良から距離をとっていく。三メートルくらい離れると、結良が「あ！ 既読ついたよ。返信もきた」と顔を上げた。逆・電波塔か俺は。

「なんだって？」

「教授に相談事があった、話が終わったから今から行く」って

ああなんだ、よかったと二人で胸をなでおろし、待つこと二十分。

「……来ないね」

連絡を試みるも、メッセージは「送信できませんでした」とエラーが出るし、電話は繋がらない。俺の家ではこれが日常茶飯事だし、慣れきってるからさほど困らない。けど、こういうときに、しかも人を巻き込んだの電波アンラッキー発生は困る。

「俺、迎えに行ってくるわ。結良は俺が見えなくなったくらい

のタイミングでもう一回、亮に電話かけてくれる？」

微笑んで頷く結良。俺はカウンターのまでの行列や、トレーを手に席を探すウォーキングデッドの群れに逆行して、学食の出口へ歩く。

結良も亮も、今は俺のアンラッキーに巻き込まれても嫌な顔一つしない。

人はたいてい、俺のアンラッキーを最初のうちは「偶然だよ」と慰める。それが何度も重なるうちに、「すごい偶然だよね」「お祓いにも行つたほうがいいんじゃない？」とひきつった笑顔を見せる。あるとき、洒落にならない事態を目の当たりにして、ぴたりと何も言つてこなくなる。会話が少なくなつて、いつの間にか俺の前に現れなくなる。No.アンラッキーは、そういう奴らが影で呼んでいたのが定着したあだ名だ。

愛する妻の命と引き換えに得た命だからと、俺を育ててくれた父。自分達夫婦が望んで生み出した命に対する、義務みたいな何かを果たさなきゃいけないのだろう。それ以外の人は、俺に近づく義理なんてないんだから、俺には俺から遠ざかる人を恨む権利はない。それが結良と亮でも。一人になると、いつもこんなことばかり考えてしまう。

学食の出口からは、大学図書館が見える。その横には、景観を良くするためだと思われる芝生があり、その真ん中に大きな桜の木が立っている。その木の下に、見慣れたさわやかショートトの男が屈んでいた。

出口の透明なガラス扉を押す。

「おーい、亮！」

俺の声に気づいた亮は、振り向いて手招きを……しようとした手で、慌てて俺の頭上をさす。あ、もしかして。俺は一步右にずれて歩き出した。さっきまで俺が立っていた場所に、学食の二階にある窓から吊るされていた大学生協の看板が落ちた。木の板で補強してあつたらしく、音を立てて砕けた。「助かった。ありがとう」

死亡フラグを回避し、無事に亮のもとに辿り着いたが、亮は屈んだまま動かない。

「何やってんだよ？ 結良が中で待ってる」

「これ……なんだろう」

今度、亮が指さしたのは木の根元だった。そこには両手に収まるサイズの、新聞紙と木の枝で覆われた何かが落ちていた。

「鳥の巣？」

「ああ、鳥の巣か！ この木から落ちたのかな」

昨夜は、二月らしい氷のような風が吹き荒れていた。こんな軽い巣は簡単に吹き飛ばされてもおかしくない。

「木に戻さないよ、誰かに踏まれたりするかも。枝の上に置いておくか」

「だな」

言い出しておいて申し訳ないけれど、俺が触ると巣が壊れる気がするので、亮に巣を戻してもらつたことにした。

巣を拾い上げた亮の第一声、「重っ」。

「え、鳥の巣って重いのか……?」

「鉄の塊みたいに重いんだけど」

亮は鳥の巣を手の中で回転させくるくる眺める。俺も巣を目で追う。新聞紙と木の枝の間から覗く、青い線と赤い線。

亮と俺はたぶん同時に気づいた。コレは、鳥の巣じゃない。

「爆弾?」

俺達は顔を見合わせ、木の枝を払っていく。

真四角の、黒い箱。青と赤の二本の銅線。

「時限爆弾じゃね?」

普通、爆弾をみかけたら大騒ぎするものだろうが、亮は「あれコンビニじゃね?」のテンションで、俺も「なんか買うものあるなら寄ってく?」のテンションで「もしそうなら通報しよう」と返していた。あまりに突然、現実味のないアンラッキーに遭遇すると、人は間抜けなくらい日常的な反応をする。亮は眉間に皺を寄せて、箱に表示された赤い数字を読み上げる。

「残り時間が……二分三秒」

「もつと早く言えよ!」

どうする? もうどこに通報しようと逃げようと、何も間に合わない。一か八か、銅線を切るか。

「亮、ハサミある?」

「あるけど」

背負っていたリュックから取り出したハサミと爆弾を亮からひつつくる。

「俺、今日は逆・電波塔だから学食の中に入って、結良に時

限爆弾の赤と青、どっち切るのが正解率高いのか聞いて電話で教えて!」

「逆・電波塔って何?」

知らない説明と知らない返事。十秒経過。残り一分三十秒。

「いいから早く!」

結良がクイズ番組を見るのが好きで、もしかしたらどっちの正解率が高いとか、人間はこちの線を選びやすいとかいう確率を知っているかもしれないと期待しているからだと言明する時間はない。もし電話が残り十秒の時点で来なかつたら、俺が勝手に切る。どっちにしろ、亮をこの場から離せればいい。

亮が走って学食の中に入る。残り一分。

ハサミと爆弾を持って、離れる、離れると叫んで周りに非難を促しながら待機。残り二十秒。

結良からの着信。残り十秒。

『ごめん! そういうの分かんない!』

残り七秒。

『弱なら』

残り六秒。

『青い線と赤い線、どっちを切る?』

四秒。

「あああ、赤!」

二秒。

『青を切って!』

ブツン。

次の日、俺は人生初で、きつと人生最後の賞状を貰った。

賞状に書かれた墨の文章を読んで、俺はもう一度、弱という漢字の入った四字熟語を調べた。抑強扶弱っていうのがあるらしい。母は、こういう意味で俺の名前を決めたんだろうか。

この先の人生もきつとろくでもないけど、少しでも、名を表す体になりたい。